

岐阜市立加納幼稚園 最優秀園 実践発表会 開催レポート

2025年7月12日（土）、岐阜市立加納幼稚園において、ソニー幼児教育支援プログラム 保育実践論文 最優秀園 実践発表会を開催しました。全国各地から総勢277名が参加してくださいました。

発表会概要

1. 日時：2025年7月12日（土） 9:00～16:35
2. 会場：岐阜市立加納幼稚園 岐阜市立加納小学校
3. 主題：『自分で考え行動（考動）する力の育成』～子どもと一緒に心ときめかせ、共に創り出す環境構成や援助について考える～
4. プログラム
 - 1) 公開保育（加納幼稚園）・公開授業（加納小学校）
 - 2) 在園・卒園保護者によるハンドベル演奏
 - 3) 加納小学校6年生による実践発表
 - 4) 加納幼稚園実践発表
 - 5) 岐阜市立小・中・義務教育学校によるポスターセッション・デジタルセッション
 - 6) グループセッション
 - 7) 記念講演 子どもが中心の「共主体」の保育へ
大豆生田啓友先生／玉川大学 教育学部 乳幼児発達学科 教授

公開保育

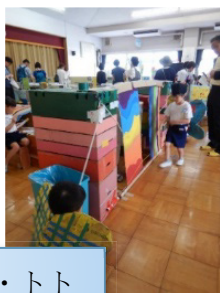
年長組では、夏祭り（加納幼稚園・アクア・トト）に向かって遊ぶ中、3つのチームに分かれてそれぞれが必要なものを考えて作ったり、小さい組の子や大勢のお客さんに対して、自分たちで創り上げた遊びを紹介したり、踊りや映画を披露したりする姿がみられた。また、「小さい組の子たちがもっと楽しくてくれるためにはどうするとよいか」や「出口のドアを回転式にするためにはどうしたらよいか」等と、チームで願いを共有しながら遊ぶことで、丁寧に作ったり、試行錯誤して遊んだりする姿につながった。

年中組では、戸外で「砂場滑り台」を作りたい思いでいろいろな素材を繰り返し試して、滑る方法を考えたり、室内では自作の虫の衣装を身に纏い、虫になって草むらに隠れて遊んだりする姿から、自分たちの願いを形にし、友達と共有して楽しむ姿がみられた。繰り返し試して遊ぶ中で、自分なりの答えを出して楽しむ力や、それぞれのなりたいものになり、自己表現を楽しむ力の育ちがみられた。

年少組では、布やスカートで着飾ったステージごっこや手裏剣のお面をつけて忍者になって踊ることを友達や教師と一緒に楽しむ姿がみられた。友達と場を共有して遊ぶ楽しさや遊びの中で友達のしていることを真似て一緒に遊ぶ楽しさを味わう姿が多く見られた。



年長：加納幼稚園・アクア・トト



年中：砂場滑り台



年少：ステージごっこ

第Ⅰ部 全体会①

●オープニング・挨拶



ハンドベル演奏



水川教育長



根本会長

●加納小学校 6年生の実践発表

本園卒園児を中心に幼児期の遊びや生活が小学校生活の基盤になっていることを発表した。また、探究的な学び：加納 Discover (KD) で、～加納の魅力を発見～「人」「もの」「こと」との出会いについて、1年生から6年生へと段階的に、わが町を知り、徐々に愛着が深まり、地域の一人として様々な課題に対する解決案を出しながら、よりよい社会にしていこうとする過程を紹介した。



第Ⅱ部 全体会②

●加納幼稚園実践発表

本園が進めている研究について、個と集団の両面から、子どもの内面の読み取りと教師の援助や環境について考察を積み重ねることによって、探究心や創造力が育まれていくことを紹介した。また、本日公開した保育に至る過程について、現在の5歳児が4歳児の頃から興味関心が続き、試行錯誤や対話を繰り返しながら取り組んできたことやそこでの子どもの姿や育ちについて発表した。

●ドキュメンテーション・架け橋期のカリキュラムの掲示

各クラスで毎月作成しているドキュメンテーションを掲示した。また、加納小学校と連携して作成した架け橋期のカリキュラム、5歳児の探究的な遊び・小学校1, 2年の生活科・3～6年の総合的な学習の時間の指導計画についても掲示した。今後、幼児教育と幼小の架け橋期の一層の充実を図る手掛かりとなるよう、幼児期の子どもの見方・考え方、また幼児期の学びが小学校期へ円滑に接続される過程を紹介した。



●岐阜市立小・中・義務教育学校によるポスターセッション・デジタルセッション

7校がそれぞれ各校で取り組んでいる探究学習、生活科、総合的な学習の時間、スタートカリキュラム、各教科等の発表を行った。参加者は興味があるブースを時間内で回った。参加した方からは、「小学校の先生が遊びの中の学びと表現して説明していることに感動した。」「中学校でも幼児期のように探究的に授業を進められていることを知り、取り組みが一貫されていることを感じた」等の意見をいただいた。各校の特色ある取り組みから、幼小中と子どもたちの学びが連続していることを実感する貴重な機会となった。



●グループセッション

探究心と創造力の高まりを観点に子どもの姿や教師の援助や環境について語り合った。その中で、「“どうすればいいのかな？”と問いかけることで自ら考え、やってみようとする姿につながる。」「大人が子どもの気づきを把握し、適切なタイミングで共感し、さらに探究につながる援助がなされている。」「子どもの経験の積み重ねで今がある。子ども一人一人のやりたいことに合った環境を創っていくことが大切である。」



「失敗と思えることに対して、そこから考えたり、学んだりする経験を積むことにより、創造力が育まれる。」等が話題になった。様々な視点から保育を見つめることによって、今後の取り組みへの見方が広がったようだった。

記念講演 子どもが中心の「共主体」の保育へ 大豆生田啓友先生／玉川大学 教授

・加納幼稚園の子どもの姿より

5歳児が、水族館をイメージして作ったトンネルの中にあるライトについて、参観者にずっと説明していた姿から、子ども主体で、これまでの遊びを創り出してきた過程が見えた。また、人魚になりきり踊っていた子どもたちには、個の特徴が書かれたカードもあり、周りの子どもたちも互いにその子らしさを受け止め合っていることも伝わってきた。

カマキリのケースをカートに乗せて散歩をする4歳児は、あえてゆっくりと歩いている。その姿から参観者に見せようとしているのではないか。自分が大切にしているカマキリだからこそ、見てもらいたいという思いが湧いてくるのではないか。その扱いの丁寧さから、日頃から愛着をもって接していることが読み取れた。



3歳児はお気に入りのダンスショーを披露していた。一人一人が、自分が主役であると思いながら、生き生きと遊んでいた。また、その隣でなりたいものになるために、黙々と制作している子もいた。個の遊びの充実が先生や友達とつながっていくことを感じた。

・日常は、“〇〇してみたらどうなるかな？”の繰り返し

子どもたちのウェルビーイングとなるようにアタッチメントや遊びと体験を積み重ねていくことが大切である。信頼できる大人がいることで、園でもワクワクすることができる。また、そのためには探究がキーワードとなる。1歳児でもすでに探究している。1歳児の色水遊びでは、水をこぼして入れることの繰り返しである。その中で、高月齢になるにつれて道具を使うようになる。そこで、子どもは、“〇〇してみたらどうなるかな？”ということを繰り返している。子どもの見え方が変わることで、子どもの遊びの中の学びが見えてくる。それを、保護者に発信していくことで、保護者もまた、子どもや園の味方になっていく。

・その子らしさが主体性

主体性がない子どもとは、発言しない子どものことではない。そもそも、その子らしさが主体性である。積極的に発言しない子どもも感じたり、考えたりしている。主体性ということは、やりたい放題にやる訳ではなく、相手のことを考え、思いやることも大切である。子どもも大人も主体、保護者だって主体、そして地域や物、自然も主体であり、共に育て、共に育つことが大切である。